

The Role and Development of Casa, a Student Commons in the Faculty of Humanities

ESAKA Yukiko
YOSHINAGA Takanori
TAMURA Yuka

In 2018, students and teachers in the Faculty of Humanities created the student commons Casa to promote and activate the Faculty. We have continued a practical study of Casa since then. In 2018, we used the basement space of Seifu-kan, and in 2019, we used room-R101 (Student Commons) and room-R119 (Humanities Library) in Ryukei-kan to conduct monthly and semi-annual events.

In 2020, we reviewed and assessed our activities, confirming that our initial objectives were to create a place where diverse students could come together, and thereby to foster greater understanding among diverse cultures in anticipation of the School of International Cultural Studies that was launched in 2021. Unfortunately our activities were greatly curtailed by the unexpected onset of the coronavirus crisis.

Interviews with students revealed that they felt isolated because they were unable to use the university campus or see their friends; they also felt anxious about carrying out their studies. In order to alleviate students' anxieties and dissatisfactions, we conducted the following activities.

First, we set up "Seika Humanities Casa," a LINE chat room where students could freely express their concerns. Second, we filmed interviews with faculty members and posted them on Casa's Facebook and Twitter pages.

Concerning the online chat room, although there were not many postings, more than thirty people registered and exchanged opinions on writing reports and other matters. Concerning the interviews, we filmed and released two-minute videos of each teacher to help first-year students who felt anxious about studying at university and could not meet their teachers in person in "remote" classes. Some videos were viewed more than a hundred times. In addition to feeling isolated and frustrated about not being able to commute to school, the other most common problem was the problem of eating. Some students said they were not used to living alone and could not cook, so we held simple cooking classes on Zoom.

After face-to-face classes resumed in the second semester, we held a welcome event for first-year students to help them make friends and get to know the university.

Even under the corona situation, the connection between the faculty members was maintained, through events and projects. They were carefully held from the perspective of preventing coronavirus infection.

In the future, we plan to focus on the following: obtaining external funding, fostering student staff who can provide mutual aid, and publicizing the faculty by students.

人文学部スチューデント・コモンズCasaの 役割と発展

恵 阪 友紀子 ESAKA Yukiko
吉 永 隆 記 YOSHINAGA Takanori
田 村 有 香 TAMURA Yuka

はじめに

2018年より、京都精華大学人文学部では学部活性化を目的として学生と教員がともに、さまざまな活動を行うスチューデント・コモンズ Casa を立ち上げ、コモンズに関する実践研究を行ってきた。

1年目の2018年度は清風館地下スペースを利用し、2年目の2019年度は流溪館 R101（スチューデント・コモンズ）、R119（人文ライブラリー）を利用し、月例のイベントや半期に一度のイベント等を実施してきた。

2020年度は、3年目としてこれまでの活動を振り返り、総まとめとして活動を行った。当初の目的としては、2021年度から始まる国際文化学部を見越して、(1) 多様な学生の居場所作り、(2) 多様な文化への理解の醸成の2点を掲げていたが、思いがけないコロナ禍によって活動は大幅に制限された。

年度当初はほぼ活動できない状態であったが、学生からの要望などを取り上げつつ、前期はオンライン、後期は感染対策に注意しながら対面も取り入れて活動を行った。

本稿では、これまで当たり前であった通学や人との接触が大きく制限される中で、Casaとして何ができるのか、何が求められているのかを試行錯誤しながら進めた活動の内容を振り返り、分析しつつ紹介する。

2020年度の教員体制は、2018年度から活動を主導している田村・恵阪に加え、高橋・久留島・吉永・南が参加し、ここに新任教員（阿毛・清水・藤枝・吉元・中岡）がオブザーバーとして加わり、活動を行った。

1. 2020年度前期の活動

これまでは、3月末のガイダンスで新規学生スタッフを募集し、新入生歓迎行事などを行っていたが、2020年度は募集、活動ともに見合わせるようになった。また、4月当初は教員も慣れない遠隔授業への対応で、活動は何もできなかった。

5月中旬ごろから、学生スタッフを中心に現状での不安などを聞き取ったところ、大学キャンパスを利用できず、友人とも会えずに孤立していること、また授業課題への取り組みに不安を覚えていることがわかってきた。

そこで、このような学生の不安や不満を解消するため、以下のような活動を行った。

- (1) 学生の不安を自由に吐き出せる LINE オープンチャット「精華人文 Casa」の開設
- (2) 教員インタビューの撮影と Casa の Facebook や Twitter での公開
- (3) オンラインでの「先生を囲む会」

ここでは、それぞれの取り組みについて紹介する。

1-1. LINE オープンチャット

コロナ禍で通学できないなか、最も困っていることを聞いたところ、人とのつながりがなくなったことが大きいということであった。

対面での授業であれば、授業についてわからないこと、課題についてのささいな疑問などは、同じ教室の学生に尋ねることができた。しかし、オンライン授業では教員への問い合わせにも時間がかかり、また同じ授業を受講している学生が誰かもわからず、情報共有もしづらいつのことであった。

そこで、学生になじみがあり、手軽に情報共有ができるツールとしてLINEのオープンチャット機能を利用することにした。LINEオープンチャットはニックネームでの参加が可能であり、ダイレクトメッセージも送れないことから、個人情報さらけ出す危険性もなく、手軽に利用できる判断した¹。

オープンチャットの設置目的としては学生の交流ではあるが、個人攻撃などが無いとは限らないので、教員も見守りをする事とした。

オープンチャットの開設に当たっては、①非公開型のオープンチャットとし、②参加QRコードは学部学生にのみ配布し、参加も学部学生に限った。

さらに、以下のような禁止事項および対策を設けて運営することとし、いつでもこの内容が確認できるように「ノート」の機能を使って利用者に注意を促している。

禁止事項については、誹謗中傷、個人攻撃、個人情報の交換禁止といった基本的な事項を掲げ、過度な禁止項目は設けなかった。

対策としては、禁止事項に触れる書き込みは注意した上で削除、繰り返し注意を受けた場合は強制退会などの注意書きをした。ただし、2021年2月末時点で特に禁止事項に触れるような書き込みは確認されていない。

オープンチャットの登録者は2021年2月末時点では36人であり、利用者はそれほど多くはなく、十分な周知ができていない状態ではないものの、オンラインイベントの告知、授業レポートに関するやりとり、コロナ禍での過ごし方など、さまざまな意見交換が行われ、一定の効果は上げている。

1-2. 教員インタビュー

人文学部では2年次から文学・歴史・社会の3専攻に分かれ、さらにゼミ体験の授業を経て自分の所属するゼミを決定することになる。しかし、遠隔授業ではどのような教員がゼミを担当し、何を専門にしているのかが十分に伝わらない。1年生にとっても、大学に通う機会がないまま遠隔授業になってしまったため、教員を知る機会が持てなかった。

そこで、教員インタビューを企画し、学生が教員のことを知る機会を設けた。

インタビューはCasaの広報に利用しているTwitter(人文Casa)とFacebookで公開するため、2分程度でまとめた。質問項目は学生から意見を募り、インタビュー自体は教員が行い、人文学部の教員35名中27名のインタビューを実施した。

質問内容は、専門分野、宝物は何か、休日に行っていること、学生時代に自粛生活になったら何をしていたか、最近あったうれしい出来事、1日で1億円を使うとしたら何をするかなどをランダムに質問し、最後に学生へのメッセージを依頼した。

公開した動画の再生回数は、多いもので300回程度、平均100回ほどであった(2021年2月末時点)。視聴した学生からは、どんな教員がいるのかがわかった、普段とは違う先生の顔を知ることができたなど、好評であった。また、卒業生からの視聴もあり、久しぶりに先生の顔が見られたなどの感想が寄せられた。

1-3. オンラインでの「先生を囲む会」

4、5月ごろは学生も教員も遠隔授業への対応に追われる状態であったが、少し落ち着いてきた6月以降は、学生からも何か授業以外でのつながりを持ちたいとの声が出てきた。

《表1》前期の「先生を囲む会」

1	<p>恵阪先生と伝統行事を語る会 6/29(月) 14:00~14:30 参加者(学生6人、教員3人、職員1人) 6月末に行われる水無月祓(夏越しの祓)の由来や現在の実施形態などについて紹介。</p>
2	<p>南先生と京都(西陣)のまちづくりを語る会 7/7(火) 13:00~14:00 参加者(学生2人、教員4人) 西陣のまちづくりの様子、歴史的背景などを紹介。</p>
3	<p>幻の料理人が30分で4品のコンロを使わないスペイン料理にチャレンジ 7/21(火) 13:30~14:00 参加者(学生6名、教員1名) 幻の料理人:恵阪、吉永、阿毛、案内人:田村 身近な材料でできるお手軽料理を紹介。 「幻の料理人」と称した教員がそれぞれの料理を作る様子を中継。</p>
4	<p>柳沢先生・吉永先生と歴史上の刀剣を語る会(戦国編) 7/28(火) 13:30~14:00 参加者(学生6名、教員2名、職員1名) 歴史解説:吉永、ゲームプレイヤー:柳沢 ゲームで人気の刀剣について、歴史的背景などを解説。</p>

そこで、2019年度から始めた「先生を囲む会」（以下、適宜「囲む会」）をオンライン（Zoom）で企画した。実施内容と概略を《表1》にまとめた。

Zoomでの実施であったことなどから、全体的に参加者はそれほど多くはなかったが、参加した学生からは、久しぶりに授業以外で人に会えたなどの意見が聞かれた。

とくに料理の会では、外食できずに自炊の機会が増えたが、毎回同じような料理しか作れない、一人暮らしを始めたばかりで何を作ればいいのかかわからないという学生から好評であった。



【写真1】 新入生歓迎イベント（木野愛宕神社）

2. 2020年度後期の活動

2-1. 新スタッフの募集

例年、Casaの新規スタッフ募集は、年度初頭の新入生歓迎会（次項参照）を経て実施されていた。しかし、2020年度前期は新型コロナウイルス感染症の影響で対面授業が実施されず、これに伴い、新入生歓迎会や新規学生スタッフの募集も延期することとなった。

新スタッフの募集が本格化したのは、対面授業が再開された後期以降である。募集は、主に新入生向けの授業等を活用し、学生スタッフによる活動紹介をしたうえで、参加してくれそうな新入生を勧誘した。また、活動に関心を寄せてくれた上回生からも新スタッフとして募集に応じてくれた学生が現れた。

新スタッフについては、14名がCasa教員による面談を経た後、正式に活動に参加している。2020年度の新スタッフは、新入生が10名、上回生が4名であった。

2-2. 新入生歓迎イベントの実施

Casaでは、新年度開始間もない時期（4～5月）に、人文学部の新入生を対象とした新入生歓迎会を実施することが恒例であった。人文学部としては最後の新入生となる2020年度新入生に対しても、当初例年通り歓迎会を開く計画であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大を受けた大学の感染症対策ガイドラインに従って、やむを得ず延期することとなった。大学の入構制限等が緩和されたことを受け、実際に新入生歓迎会の計画が具体的化したのは夏季休暇中のことである。

Casaで検討を重ねた結果、2020年度の新入生歓迎イベントは10月の初年次演習の時間（月曜or火曜4・5限）を利用して実施することとなった。す

なわち、10月2～4週の初年次演習の時間をこれに充てることとなった。各週では、基本的に次の3つのプログラムを実施した。すなわち、A. 木野・幡枝周辺の散策（引率教員：柳沢・吉永）[写真1]、B. 幡枝八幡・妙満寺見学（引率教員：久留島・堤）、C. キャンパス散策＋紙づくりワークショップ（担当教員：恵阪・田村・吉元・阿毛）である。

各プログラムの新入生参加者は基本的に初年次演習の1クラス分となる。この計画を実施するにあたっては、初年次演習担当教員各位の協力を得て実現することができた。

以上のように、2020年度新入生歓迎イベントはイレギュラーな形式で実施することとなった。企画・開催にあたっては、対面授業を経験して間もない時期の新入生に対し、歓迎イベントを通じて親睦を深めてもらうことを前提としつつ、大学やその周囲の自然環境および地域の歴史や文化に触れてもらうことも重要な狙いであった。

この点については、A・Bのプランが地域理解（歴史・文化）に重きを置き、Cのプランは大学・自然環境を通じた共同作業を重視したものとなっている。各プログラムは予定通り実施され、大きな問題もなく新入生歓迎イベントは成功した。イベント後に実施した新入生へのアンケートにおいても、地域理解を深めることができたり、同級生との親睦が深まったという意見も見られ、イベントの目的は達せられたと感じる。

2-3. 対面での「先生を囲む会」

前述の通り、2020年度前期の「先生を囲む会」は、オンライン形式での開催であったが、後期より原則対面授業となったことを受け、対面での開催を企画した。開催準備にあたっては、教員・学生スタッフともに感染症対策の検討を重ねつつ、いくつかの会

《表2》後期の「囲む会」

1	阿毛先生・恵阪先生と世界の愛の今昔を語る会 11/26 (木) 13:00～14:00 参加者 (学生5人、教員3人) 現代アフリカと古代日本における愛の伝え方や価値観について解説。
2	水田先生とDJ体験会 12/9 (水)、12/16 (水) 参加者 (1回目:学生16人、教員7人、2回目:学生7人、教員3人) 2週に渡り、昼休み(12:15～13:00)にR-101教室にて学生のDJ体験会を実施(体験者は事前申し込み)。
3	西アフリカの砂漠化問題と人々の取り組み(清水先生・服部先生) 12/28 (水) 13:00～14:30 参加者 (学生3名、教員4名) アフリカでの現地調査に携わってきた清水先生と服部先生が対談形式で解説。その後、学生も参加して意見交換会を実施。
4	藤枝先生とアジア・太平洋を語る会 1/14 (木) 16:20～17:50 参加者 (学生4名) 太平洋に面するアジア地域の国々の生活や建築物について解説。
5	江戸時代の遊女—文学と歴史、それぞれから見える姿—(堤先生・吉元先生) 1/20 (水) 12:10～14:30 参加者 (学生3名、教員4名) 江戸時代の遊女について、日本文学と歴史学それぞれの立場から解説。

では事前申し込み制による人数制限を導入するなど、大学のガイドラインに基づいた感染症対策も実施された。実施内容などは《表2》としてまとめた。

また、後期の「囲む会」は、学生スタッフによる提案がなされ、学生主体の企画を教員がサポートする形で準備が進んだ。学生スタッフの問題意識や関心事が大いに生かされたと感じる。その成果として、後期の「囲む会」は、《表2》に挙げた5つの企画・開催が実現している。

旧来の人文学部教員による「囲む会」も開催しつつ、次年度の国際文化学部開設を踏まえ、グローバルスタディーズ学科に配属予定の新任教員を「囲む会」が積極的に企画されている〔写真2〕。これは、「囲む会」を通じて新任教員の紹介や交流を兼ねた企画が練られたためであり、各教員の専門分野や研究経験に基づいた話を学生らが直接聞くことができたことは、大きな成果であったと感じる。



〔写真2〕水田先生とDJ体験会

また、「囲む会」には、教員と学生の交流の場として積極的に活用してもらいたいという意図もある。その点については、オンライン形式よりも対面による形式の方が、意見交換や質問などが活発であり、より充実した内容になるという手ごたえも感じた。

3. コロナ禍での活動

2020年度の活動において、最も留意したことは、新型コロナウイルス感染防止対策である。コミュニケーションが大切なコモンズの取り組みにおいて、対面での活動が制限されることは、非常に大きなダメージとなる。いかに感染防止につとめながら学生同士、学生と教員のつながりを確保して発展させていけるか、という大きな課題に直面し続けた1年となったが、同時に、工夫次第で一定程度の課題解決ができること、また、様々な行為が制限される中でこそより強く絆が求められることなどを実感した年でもあった。

以下に、コロナ禍に対応した活動の内容とその効果について述べる。

3-1. 感染対策を講じたミーティング

Casaでは毎週水曜日の昼休みに、定例でミーティングを開催することとした。前期中はオンラインに限定されたが、10回のZoomミーティングを開催した。出席者数は毎回、学生が6～8名、教員が6～8名程度であった。定期的にミーティングを行うことで、大学に通えない学生も帰属意識を持つことができ、学生同士のつながりを持つ場にもなった。

後期は大学全体として70%程度が対面授業になったため、可能な限り対面でミーティングを行う

こととした。後述する昼食場所として確保した黎明館 L-201 教室（定員 240 名、感染対策時定員 120 名）を利用し、空間を広く使って換気をしながら、15 回のミーティングを開催した。ミーティング参加者は台帳に記載し、記録を残した。対面の方が出席しやすいことや、1 年生が新たに参加したことで、後期の学生の出席者数が前期より多くなり毎回 10 名程度、教員は 5～8 名程度の出席であった。

対面と Zoom とを状況によって切り替えながらも、ミーティングを定例化することで、学生や教員の継続的な関わりを確保することができた。大きなイベントが実施できない状況でも、ミーティングを継続開催していることによって、メンバーの Casa への帰属意識が醸成されていく経過が観察された。

3-2. 居場所確保の取り組み

例年は、コモンズ（流溪館 R-101）の部屋での食事が可能であったが、2020 年度については、感染防止の観点から、広さが充分ではないこの部屋を食事禁止とした。

後期は対面授業が始まり、昼休みに友人と食事ができる場所が学部生にとって必要であるとの認識から、月曜日から金曜日まで 240 人が定員の教室（黎明館 L-201）を Casa の名前で昼休みに確保した。Casa で昼食場所を確保していることは、学部生の全員にセイカポータルで通知した。利用時には台帳を記入すること、授業開始 10 分前には退室することなども周知した。

台帳から読み取る限り、1 日当たり 10～30 名程度の利用があり、学生からも継続的な確保の要望が上がるなど、昼食時の居場所の必要性が明らかとなった。

また後期には、コモンズ（流溪館 R-101）とライブラリー（流溪館 R-119）も 9:00～20:00 まで常時利用可能にした。机の数は通常の半分程度に減らし、なおかつそのうちの半分の席は利用不可とした。利用時間中は常に入口 2 カ所の扉を開けたままにし、入口付近に利用者台帳と消毒液を設置した。また、学部教員の研究室がほとんど流溪館にあることから、コモンズとライブラリーの部屋の前を通りかかる時には、学生による部屋の使い方に問題がないかの確認をしてくれるように、学部教員全員に依頼した。その結果として、教員内での Casa に対する認知も促進された。

台帳によると、コモンズは 1 日当たり 10～20 名程度、ライブラリーは 5～10 名程度の利用があった。

コモンズの部屋にはパソコンやプリンタも利用でき、ライブラリーにはソファが設置されていて、様々な利用のニーズにこたえることができるのも定常的な利用につながっている。

3-3. 活動上の注意点

対面の活動の場合は、(1) 部屋の換気、(2) 人数に応じた場所の確保、(3) 台帳の記入、(4) 消毒、に留意した。

4. 総括と次年度への目標

2020 年度の Casa の活動は、(1) メンバーの拡充（学生・教員とも）、(2) オンライン及び対面での学生の居場所確保、(3) 教員紹介動画の撮影と公開、(4) 教員を囲む会の企画と実施（前期はオンラインで 4 回、後期は対面で 6 回）、(5) 新入生歓迎イベントの実施、(6) 週 1 回の定期ミーティングの開催、に大きく分けられる。

「先生を囲む会」などの学生向けイベントを開催する際には、必ず学部生全員にセイカポータルを通じて周知した。また、月に 1 回開催される学部教員会議で毎回 Casa の活動の報告を行い、教員にも学生にも、Casa での活動が広く浸透するよう心掛けた。さらに、学生が主体となり、イベントのチラシを自主的に制作して学内の複数個所に掲示した。その結果、前年度よりも学部内での認知度が向上し、学生の参加の確保と教員のイベントへの協力につながった。

2021 年度の活動に向けて、ベネッセコーポレーションが 2020 年度末に募集した「Udemy を活用した大学教育プログラムの実践及び検証に関する教育支援制度」に Casa で応募し、採択された。Udemy とはベネッセコーポレーションが全世界に提供するオンラインコンテンツである。Casa の学生を「学習サポーターチーム」「広報チーム」に分け、学習サポーターチームでは 1 年生の学びのサポートを、広報チームでは Casa の活動や学生生活に必要な情報の広報を行っていく予定である。

なお、2020 年度の Casa の活動については、学長指定課題研究の助成を受けた。Casa への学長指定課題研究の助成は 2018 年度から 3 年間連続となる。この場を借りて感謝申し上げたい。

¹ 「LINE みんなの使い方ガイド」参照

<https://guide.line.me/ja/services/openchat.html> (2021 年 8 月 29 日最終閲覧)